ま　え　が　き

本書は，平成5年度「アフリカの多部族国家と複数政党制」研究会（主査：原口武彦）の研究成果のひとつである。

研究会は，原口武彦（主査，総合研究部アフリカ総合研究プロジェクト・チーム），津田みわ（幹事，地域研究部）を共同研究者とし，これにオブザーバーとして池野旬（地域研究部），望月克哉（総合研究部），佐藤章（総合研究部アフリカ総合研究プロジェクト・チーム）が加わって構成された。

研究会発足時に掲げたわれわれの問題意識は次のようなものであった。

サハラ以南アフリカの多くの国ぐには，多部族国家として独立した。これらの諸国が植民地時代から継承したものは，植民地境界をそのまま領土的境界とした国家という枠組みだけであって，それを担う主体としての国民の形成は，独立後の課題とされた。ほとんどの国で，一党制ないしは軍政がしかれたが，これらの体制は，諸部族を統合しひとつの国民を形成するという国家観によって正当化され，許容されてきた。

しかし，1980年代末からの政治的民主化の潮流のなかで複数政党制への移行（または復帰）がほとんどの国で実施されるという状況のもとで，サハラ以南のアフリカ諸国のもつ多部族性という特質の意味が問い直されようとしている。そもそも部族とはどのような性格の集団であり，国家建設の過程でひとつの国民として統合され消滅していく存在なのか。また，いわゆる政治的民主化の制度的表現のひとつとして導入されつつある複数政党制は，多部族性という条件のなかでどのような展開を遂げるのか。

以上のような問題意識のもとに，われわれは，西アフリカ仏語圏のコートジボワールと東アフリカ英語圏のケニアを具体的な考察対象として選択し，これら2つの国の動態を具体的に検討することを，本研究会の課題としたのである。

ケニアについては津田みわが担当し，復帰した複数政党制のもとで初めて実施された1992年の総選挙に至るまでの過程を，政党と部族との関連に焦点をあてて分析を行った*。本書の著者（原口武彦）は，コートジボワールを担当した。具体的な作業としては，本研究会のそれに通底する問題関心にもとづいてこれまで行ってきた研究活動の諸成果を，現時点で再検討し，それを一書に集大成することを目指した。その成果が本書である。

研究会においては，共同研究者の津田みわはもとより，オブザーバー参加の池野旬，望月克哉，佐藤章の諸氏からも，筆者の所説に対して貴重な批判・コメントをいただいた。真島一郎氏（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）と渡辺公三氏（立命館大学）は，筆者の前著**を詳細に検討し，批判，コメントをよせられた。これらの批判，コメントは，前著をもとに改めて本書をまとめあげる意欲を筆者に与えてくれた。さらに本書については，佐藤章氏が草稿を詳細に検討し，貴重なコメント，批判をよせられた。それらは何度かにわたる大幅な書き改め，推敲を行うのに大いに役立たさせていただいた。

最後に私ごとながら，1994年3月をもって32年間勤務したアジア経済研究所を退職し，本書執筆は職員としての最後の仕事となった。32年間にわたってご厚情を賜ってきた研究所の諸兄諸姉に，そして30余年にわたって友情を育んできたコートジボワールの友人たちに，筆者の多大な感謝のささやかなしるしとして，本書を献ずることをお許しいただきたい。

1996年1月

原口武彦

＊　津田みわの研究成果は，別途『アジア経済』で発表する予定である。

＊＊　原口武彦『部族—その意味とコート・ジボワールの現実—』アジア経済研究所，1975年。